

學界展望

最近國史學界の動向

一

戦後數年の間、相つゞ變革の過程にあつて學問研究の凡ゆる分野に生じた嚴しい自己批判の現象は、國史學においては、それが戦時中極度の政治的支配の下に歪曲化せられたといふ特殊事情により重要な意味をもつものである。従つて最近における國史研究の動向を概観するとき主として採りあげらるべきは、この最も困難な時期を生き抜く學徒が如何にして自己の課題を遂行しつゝあるかを考へることであらう。

最初に研究活動の實情を示す一現象として著書、雜誌の刊行状態を見れば、前者においては舊著の再刊が顯著であ

るに對し、後者には新らしい研究立場によれる新刊の數多くあつて、研究の多彩なる姿を思はしめるものがある。

現在發行されてゐる歴史研究の専門雜誌のうち、長い傳統をもつ東京大學史學科の史學雜誌は昭和二十年度を六月號をもつて打切り二十一年七月號を之に續くものとした。この一ケ年の休刊は、學界の荷へる苦惱を示すものでもあつたが、續刊せられた七月號の論文は精緻堅實なる考證、論考をもつて傳統的學風を傳へてゐる。國史關係の論文としては坂本太郎氏「纂紀と日本書紀」曾我部靜雄氏「日唐令に見ゆる孝子順孫の條文について」がある。之に對し京都大學史學科關係者を中心とする史料は、二十年八月三十卷二號を出した後、二十一年三月三號を世におくつた。季刊

の原則よりすれば一季の遅刊であるが、打切ることなく刊行せられ、且つ本號には原隨園氏「ギリシヤに於ける歴史學の展開」梅原末治氏「本邦古墳出土の同范鏡に就いての一二の考察」那波利貞氏「通俗的滑稽的文學作品」等史學科教授の相並んで執筆してゐることは、その活動の一端を示すものである。

斯く學問研究の傳統を發展せしめようとするに對し、別個の立場における研究會の活動とその成果を示す雑誌の發行があつた。歴史學研究は戰時中休刊せるものゝ復刊（二十一年六月）であるが、従前より有した所謂進歩的傾向は時勢の變革に際して極めて鮮明となり、研究會綱領草案の中、民主々義的世界史的立場において從來の學問研究の成果を發展せしめ科學的歴史學の傳統を形成すると云つてゐる。復刊一二號論文、津田左右吉氏「シナの歴史といふもの」西岡虎之助氏「日本の農業における自給經濟生活の史的展開」につゞく大塚久雄氏「生産力と人間類型」（一二三）は大塚史學の本質を展開せるものとして批判的となり、羽仁五郎氏「神話學の課題」（一二四）は歴史と神話

の區別に當面せる日本史研究者に數多くの問題を提示し、更に一二九號には飯田貫一氏譯「マルクス資本制生産に先行する諸形態」およびその解説のため全頁をあててゐることとは、本誌の一面を端的に表示するものと云へよう。京都においては、前者との協同を意圖する日本史研究會の組織成り、二十一年五月日本史研究（季刊）の發行を見た。その目的は、日本歴史を世界史立場において眞實正當に把握し、其等の知識を一般に普及するにあると云つてゐる。創刊號の論文、清水三男氏「近世の農政思想」内藤晃氏「山鹿素行論考」藤谷俊雄氏「日本紀年の科學的研究」村山修一氏「日本文化の神秘的性格」等は必ずしも考察の立場を一にせず、本會の成立は友人關係に依存するを思はしめたが、三號より改組し、傾向を同じくする文化人をも包含してその性格を明かにした。ついで二十一年十月創刊の歴史評論は、民主々義科學者協會の編輯にかかり同會を母胎とする研究の成果を示すものとして注意せられる。刊行の趣旨は、自らの歴史的存在に關する認識のうちに行爲し思索する人々の歴史を描くにあり、斯かる人々の抱く歴史的感情

覺に基づき歴史における新と古を本質的に判別して歴史評論を行ふことを明示してゐる。評論自體は歴史學の一面として本來具はれるものであるが、最も政治的時期において歴史研究の政治性を主張する點に特色を示すものであらう。主要論文として、中西功氏「中國の勤勞大衆の史觀」藤間生大氏「家族國家と勞働者階級」遠山茂樹氏「幕末政治過程における皇室」廣島定吉氏「資本論と商品交換の歴史」等に本誌の一般傾向が窺はれる。やゝ遅れて二十二年一月國民の歴史が創刊せられた。本誌は東京、京都兩大學史學科教授その他を評議員となし、その指導下にある若い學徒により編輯せられたもので、戦後における歴史研究の態度が戦時とは異なる方向に歪められてゐることを否定して、科學的研究による正しい日本史の知識を國民に與へようとするにあり、再開せられた國史教育における文部省の方針に添ふもののごとくである。其他にも日本歴史、新歴史等幾つかの歴史雜誌のあるうち、二十二年九月創刊の文化史研究は、科學史、技術史に重點を置くところに新しい學界の動向を反映するものあり、山田坂仁氏「新らしき文化

史のために」伊豆公夫氏「日本文化の世界史的なもの」洞富雄氏「日華兩國は初傳のヨーロッパ技術をいかに受容したか」等を收めてゐる。

斯かる歴史研究の盛行に際して、文教の振興を任とする文部省においては、人文科學の過去における偏向を清算して科學的研究の發達および普及を目的とする人文科學委員會を組織した。(二十一年九月)本會は文學、史學、哲學、法學、經濟學の五部門より成り、現在學界の中心に活動せる學者を主體としての自主的運營によるものであるが、斯かる綜合的委員會の活動は各部門の孤立による偏向を是正するに力あり歴史研究の學問性を深める上に多く期待すべきものがあらう。二十二年三月には機關誌人文創刊せられ林健太郎氏「科學的歴史學への途」をのせてゐる。なほ附載の學界消息、學界研究所一覽、研究者要覽、文獻目錄も研究者に有益な記録である。

二

以上の諸雜誌および文化雜誌の論文、新刊の著書等を通

通じて認められる自己批判の方向は、世界史的視野にたち科學的方法をもつて正しき歴史觀の確立と歴史學家の把握その普及を目的とするは軌を一にするが、その如何なる立場と方法がより正しいかに關して種々の論議が繰り返されてゐるのである。

歴史の本質に關する考察は歴史哲學者により、西谷啓治氏「民族の自覺と歴史的意識」(展覧二十二年一月)和辻哲郎氏「歴史的自覺の問題」(展覧二十二年七月)等論ぜられるとともに、歴史家においても、大類伸氏「歴史的なるもの」(國民の歴史三)は、歴史意識の昂揚は人間の自覺によること、歴史的思考は人間的に考へることを平易に説き、林健太郎氏「科學的歴史學への途」(人文御刊號)は、歴史學が科學性を具へる條件として、實證性、理論性の一致を説き歴史の主體に關して社會的制約をうけつゝも超越的面をもてる人間性を考へるところに、科學的認識とともに藝術的認識の行はるべきことを云ひ、近代史學理論の要約を展示するものである。

斯く歴史の形成における人間性の問題は唯物史觀の立場

よりするする激しい批判の的となつた。(例へば、大塚久雄氏の生産力と人間類型の思考に對し、マルキシズムよりの逸脫とすることを見解)この派の所説は、未來を荷ふ人民の歴史は唯物史觀の立場においてのみ描かれるといふ信條を固守するのであるが、問題は常に繰り返されるごとく、唯物史觀の科學性およびその立場にたてる歴史研究の客觀性に關する論議を必要とするのである。例へば石田英一郎氏「世界史に於ける發展段階」(展覧二十二年十一月)。最近、大内兵衛、向坂逸郎兩氏の責任編輯雜誌唯物史觀研究の發行はこの問題理解の深化の上に期待すべきものがあるであらう。

唯物史觀の立場より提出せられた新しい歴史の型として政治史がある。最も政治的時代において學問の政治性が論議せられてゐることと關聯して重要な意味をもつものであるが、石母田正氏「政治史の課題」(歴史評論六)は、歴史學に内在する觀想的性格と實踐的性格との矛盾のうちに歴史學進歩の因を認めて、歴史の政治性を内的モメントとして把えようとする態度は、政治性に關し一般に行はれてゐる素朴な公式的見解を歴史家としての實踐のうちに深め

たものとして注視すべきであるが、文化史を批判して諸文化の社會性、歴史性をとふことなくたゞ文化相互の關聯を解釋するにすぎず、との所論は自己の立場の主張より生ずる一面的見解である。意味といふとき文化の內面的構造に關する理解を前提とし、關聯的考察は自ら諸文化の社會性を問題としてその客觀的秩序を定立しようとするのであり所謂政治的時代、人間生活の集約的表現として政治性の顯著であるとき、政治史は文化史の時代的一型として理解されるであらう。

他の型として、科學史、技術史の提唱もまた時代の傾向を表示するものである。この見解は、唯物論的哲學者および科學者によつて示されたが、前者の一例、山田坂仁氏「新らしき文化史のために」（文化史研究創刊號）は、現代文化を社會的物質的生産力の發展に基礎を置く科學文化と規定して、斯かる文化の歴史に文化史の意義を考へ、文化史家としてのウエルズの功績を認めつゝも政治と遊離せるところに限界的であることを指摘し、ソヴェートロシア現代の科學史研究方法を紹介してゐる。その所論はウエルズ

をもつて文化史家の一人者とするがごとき見解が批判されるべく、また結論として精神文化と社會的經濟的基礎との機械的對應關係を否定して兩者の制約と反作用を明らかにすべきであるとの説は、氏の否定せる觀念的立場にあることを示すものであり、新文化史の提唱は斯かる形式を抽象的ならす具體的實踐において把えるところに可能性が考へられる。歴史家は、此等とは別に、科學者の科學史論（例へば武谷三男氏の所説）に據き、その方法論を確立すべきであらう。

なほ史觀に關する特殊研究として、白井二尚氏「人種史觀考」（人文科學一・二）は、ナチス・ドイツの信條であつたこの史觀を批判して、血縁共同體と文化共同體の一致せざることより論じて人種史觀の基本的主張が客觀的普遍性を有せず科學としての價値なきことを説くものであつて戦時における史觀を拂拭すべき史家の課題に對し示唆するものをもつてゐる。

最後に國史研究において何人も云ふ世界史的立場について見れば、戰時國史をもつて世界を覆はんとしたことに對

し、世界史の一聯としてあるべき姿への反省があり、世界史成立の根據を人間性に求めることは近代史學理論の到達せる段階であつて、原隨國氏「國民の歴史」(國民の歴史二)にその簡明な所論がある。之に對して唯物史觀の立場より社會的生產關係の發展段階をもつて世界史構成の原理とする説があり、論争を展開したことは周知のところである。

その立場における日本文化理解の一例として、伊豆公夫氏「日本文化における世界史的なもの」(文化史研究創刊號)は、文化における世界史性成立の根據として、一、人類の所産であり且つ社會の發展段階に應ずることにより共通するものあること、二、諸民族文化間に相互聯關のあることを擧げ、日本文化の世界性が限界的であつたことを奴隸的アジア的、封建的等の發展段階と結びつけてゐる。この派の一般の見解を平易に述べたものとして採りあぐべきであらう。

世界史的立場と關聯して、比較研究が新らしい姿をもつて行はれたことに注意すべきものがある。例へば大塚久雄氏がマックス・ウェーバーに基づく比較經濟史の方法によ

り、日本社會の歴史的特殊性―封建的なるもの―の解明を試み批判を招いたことは、日本歴史の事實が世界的關聯において顧みられたことと共に、國史研究がその方法において世界性を著しくする一現象として將來が期待せられるのである。

國史教育に關する自己批判もまた極めて著しいものあり特に國民教育の實際と直接結びつけることよりして特殊の色彩を具へたことは當然である。今その所論を擧げる餘裕をもたないが、其等を通じて、歴史研究と歴史教育の一要るべきことを説くは、西田直二郎氏「國史教育の課題」(朝日評論二十一年四月)より伊豆公夫氏「歴史觀と歴史教育の問題」(民主主義科學創刊號)に至るまで同一であり、教育の政治よりの解放といふ點において一致する。従つてその眞實性の如何は、歴史研究における立場と方法の問題に歸着するのである。

(藤 直幹)

三

古代史に關し終戦後の國史學界に於いて最も激しく論議

が交されたのは、天皇制の問題であらう。だがこの所謂天皇制論議は、學問的な論争と言ふよりは政治的なものであつた。議論の経緯を知りたい人は、民主々義科學者協會編「科學年鑑」の關係項目でも見るがよい。こゝでは古代史に關する限りに於て簡単な紹介を試みることにする。

問題の焦點は大化前代に於ける天皇制の在り方である。

唯物史觀に立脚する人々は、天皇は厩制を以て民衆を誅求したとし（羽仁五郎氏「天皇制の解明」毎日新聞二一年一月、同氏「大化改新」朝日評論二一年六月）或は天皇は諸豪族から成る連合政權の名目上の首長に過ぎず、主導者たる權力は持たないとする。（伊豆公夫氏「日本古代史」藤間生六氏「日本古代國家」第四章）これは、社會の發展方向を原始共產制社會から階級社會へ、氏族國家から古代國家へと規定する理論よりすれば、直ちに豫想し得る結論ではあるが資料的證明は未だ不十分であつて、俄には從ひ難い。右の見解に反して津田左右吉氏は「建國の事情と萬世一系」の思想（世界二十一年四月）の中で、民衆が皇室に對して反抗を企てるやうな事情はなく、又西紀五世紀には皇室の地位はもはや

動かすべからざるものとなつてゐたやうであると云ふ意見を表明した。このやうな對立には、文獻の綿密な考察と世界の古代社會についての廣汎な理解とから検討を加へねばならぬ。或はブルジョア史學の眼界となし或は公式論の偏狹さを言ふは、何等學問を推進せしめる所以ではない。

肥後和男氏「天皇制の成立」は、天皇は宗教的首長から政治的君主へと進展したとなす通説に反して、天皇は地位の確立に伴つて神格化せられ、政治へのつながりは薄くなつたとする説を提出した。これは津田氏が前掲論文に於て天皇自らは政治の局に當らなかつたとす主張と共に、示唆する所多い見解である。肥後氏の著書は思想史を中心として叙述せられ、社會史的側面が輕視されてゐる憾みが多い。

天皇制の成立と關聯して日本國家の起源の問題も多大の關心を集めた。その起源がほゞ二、三世紀以後であることは諸家の認める所となつたが、詳細については考古學的研究の成果に期待せねばならぬ。すでに小林行雄氏、後藤守一氏等の論著があるが、省略に従ふ。この原始國家の發展

を考へるに當つては、魏志倭人傳の耶馬臺國問題が大きな意味を有して來る。三品彰英氏「中國史籍に現はれた古代日本」(日本古代社會一)は從來の研究が倭人傳中の不合理な部分(道程記事)の辻褃を合はず爲に無理な解釋を下すことが多いのに鑑み、一應これを除外して考察し大和説に落付き、石田幹之助氏「魏志の倭人傳に就いて」(日本歴史三二年七月)は、倭人傳は魏の使者の傳聞によつて記されたものであるから多くの誇張を含んでゐるとの前提の下に文中の矛盾を整理して、九州説に歸結してゐる。近年大和説に左袒する學者が多くなつたとは言へ、未だ決定を見ないのである。

上代紀年論については藤谷俊雄氏「日本紀年の科學的研究」(日本史研究一・二)と、丸山二郎氏「日本紀年論批判」とがある。共に既往の研究の紹介と批判であつて独自の紀年を立てたものではない。たゞ藤谷氏が天皇の在位年數を時代別に計算して舒明より文武に至る間が全體を通じて最も短いことを明かにし、これはこの時代の天皇が政治の最高表現であり、従つて政治上の争鬭の中心となつた爲

であると論じたのは興味深い。辻善之助氏編「日本紀年論纂」は先人の紀年論を彙編編集したものである。

社會經濟史は現在學界の注意を最も多く集めてゐる分野であり、それに應じて優れた業績の發表を見た。中でも藤間大氏「日本古代國家」が先づ擧げらるべきであらう。

氏は大化前代の共同體を親族共同體と規定し、その崩壞の後に於て成立した大家族を家族共同體と名付けこれが奈良時代の所謂郷戸に相當るものとし、更にこの家族共同體のあるものが多くの奴婢と強力な家父長權を有する古代家族に發展したことを論證した。氏は又、我が氏制が克蘭ゲンス的氏族ではなく、古代家族的な統治様式を以て組織せられた政治的集團であることを明かにし、我が古代史に對する深い洞察を示した。たゞ本書に於て筆者の理解し難いのは大化前代の奴隸の問題である。氏が上述の如く大化前代を親族共同體の時代と規定してゐる所よりすれば、この時代に奴隸制は未だ發達してゐないとしなければならぬ。然るに本書第四章に於て氏は奴隸制の存在を認めてゐるが如くである。この關係は如何に解釋すればよいのであらう

か。渡部義通氏「日本古代社會」(昨年改訂版が出た)が屯倉田莊の農民を奴隸的存在であるとしてゐるのは一應の解答であるが、中村吉治氏「日本社會史概説」は大化前代の氏族國家はまだ奴隸を有するやうな古代國家にまで發展してゐなかつたとして、社會組織の上から奴隸制の存在を否定してゐる。何れにせよ日本古代の奴隸の性格如何は、今後もなほ社會經濟史上の最も重要な問題であらう。

井上光貞氏「大化改新研究史論」(日本古代社會一)は大化改新の本質に就いての既往の研究を紹介しつゝ、大化前代の社會組織土地制度の性格に及ぶ適確な論評である。川上多助氏「日本古代社會史の研究」は既發表の論文十篇を收載したもので、古代の部及び賤民の研究と莊園及び武士の研究を中心とする。豊富な資料に立脚する着實な考察ではあるが、歴史の動的な面に對する叙述が少ないのが惜しまれる。書紀の推古紀孝德紀に見える公民を朝廷直屬の部民であるとなす説は、氏の特に主張する注目すべき解釋である。中村吉治氏の上掲著書は概説ではあるが高度の内容を持つてゐる。

和歌森太郎氏「國史における協同體の研究、上卷」は、民俗學の知見と方法を上代社會の研究に取入れた最初の著作として記念されるべきであらう。(六節民俗學の項参照) 有賀喜左衛門氏「同族と親族」(日本民俗學のために、二)は、同族と親族の性質と差異を明かにしたものであつて、直接に古代を對象としたのではないが、社會構造を考へる上に致へられる所ある論文である。折口信夫氏には「女帝」(思案、三)がある。

井上光貞氏「庚午年籍と對氏族策」(史學雜誌五六ノ三)は庚午年籍が特に重視された理由が天智天皇の定姓の政策に基くことを論じて、天皇の統治理想を糺明した。阿部武彦氏「上代氏族の祖先觀について」(史學雜誌五六ノ四)は古事記と書紀と姓氏錄の祖先系譜の異同を比較して、時代と共に祖先觀の變遷する事情を論じた。資料の搜索と解釋共に精緻を極めた力作である。村尾融氏「律令時代の財政に關する研究」(史學雜誌五六ノ一〇・一一・一二)は正倉院文書以下の古文獻を整理して多數の統計を作製し、財政の實情を數的に確かめようとした。理論的な研究が華々しく押進め

られてゐる一方、かゝる着實な論考が重ねられてゐること
はまことに學界の喜びである。徳永春雄氏「奈良時代に於
ける班田制の實施について」(史學雜誌五六ノ四・五)は班田
制實施の年次及び回数については丹念に史料を摘出してあ
るが、班田制弛緩の原因については從來の見解を始と出で
ゐない。

古代が没落して中世が誕生する原因の探究は、野心ある
史家の一度は立向ふべき目標である。石母田正氏「中世的
世界の形成」は、日本史學の水準を世界的レベルに高めん
とする抱負のもとに正面からこの問題と對決して得られた
成果である。氏はこれを東大寺領黒田莊の分析を通して具
體的に解明した。即ち古代から中世への變革を農地の直接
經營者である名主から自營農民の支配者である領主への推
移に求め、古代と中世との對立を東大寺と在地領主との抗
争に置き、さうして兩者の紛争の間に中世が在地領主の手
によつて徐々に形成されてゆく過程を示した。細部につい
ての批評はあるにしても、國史學のレベルを一步引上げた
ものとして評價せらるべきである。藤間生大氏「日本庄園

史」は同様な課題の解決を庄園體制の歴史的變化の中に求
めようとしたものであつて、内容は皆て歴史學研究、社會
經濟史學に發表せられた論文三篇を中心とする。何れも初
期庄園の本質と機能と構造とについて新しい分野を開拓し
た論考である。西岡虎之助氏「日本の農家における自給經
濟生活の史的展開」(歴史學研究一二三)は、右の二氏が古
代から中世への展開を農地經營の方式によつて考察したの
とは異なり、農家の經濟生活が自給經濟から交換經濟へと
進展してゆく點に時代の變遷を見ようとした論文である。

政治を經濟の面より解釋しようとする傾向は林屋辰三郎
氏「院政の成立に就いて」(日本史研究二)にも見える。氏
は院政を攝關政治の抑壓を目的とする皇權伸張の政策と解
する通説を排して、院にそのやうな意圖がなかつたにも拘
らず攝關家勢力の衰弱に依つて言はば自ら政權が院に歸し
たとする。そして政權を院に歸せしめた原因を、院と結合
した受領層の經濟力と院に集中した庄園とにおいた。こゝ
に大きく取上げられた受領層の實態については同氏「平安
京に於ける受領の生活」(史林三〇ノ三)に詳しい。同氏

「日本演劇の環境」にも關係論考がある。

對外關係の著書としては、池内宏氏「日本上代史の一研究」がある。任那日本府滅亡に至るまでの日鮮關係を東洋史全般に亘る深い學識から検討したもので、この方面研究の決定版と言へよう。曾我部靜雄氏と仁井田陞氏との間に交はされた唐律令上の課役の意義についての論争は、中國史の問題とは言へ關係する所廣く、看過することは許されない。仁井田氏は「唐律令上の課役制度」(史學雜誌五六ノ三)において、課役は租調庸と雜徭を意味すると言ふ通説を取り、曾我部氏は「徭役と課役と復除」(史林三一ノ二)「日唐令に見ゆる孝子順孫の條文について」(史學雜誌五六ノ七)に於て、庸と雜徭のみ意味すると言ふ反對説を掲げてゐる。

學問思想方面では桃裕行氏の大著「上代學制の研究」がある。近江奈良時代から平安末期に至る學制の組織とその變遷を叙述したもの、史料の周密な整理の後に成つただけに信頼し得る内容を有してゐる。向居淳郎氏「清原賴業傳」(日本史研究三)は平安末期の一學者の生涯を跡づけて

ゐる。佛教關係では井上惠氏「國分寺創建に於ける道慈の業績」(帝國學士院記事四ノ二)村山修一氏「日本文化の神秘的性格——主として社寺緣起を通じて」(日本史研究一)姉崎正治氏「聖德太子の大士理想」等がある。井上氏のは道慈が經典の舶載・經疏の述作等に於てなした功績をも併せ論じ、日本佛教史上に於ける道慈の地位を確立しようとした研究である。常に斬新な着眼を以て新風を學界に送りつつある柳田國男氏は、新國學談の名の下に第一「祭日考」第二「山宮考」を著した。前者は神社の祭日が二月、四月十一月に多いと言ふ事實の吟味から、後者は各地の神社にある山宮なるものゝ考察から、古代に於ける神祇信仰の性質を尋ねたものである。(六節民俗學の項參照)

日本歴史再建の基礎工作として何よりも必要な原典批判に於ても、我々は優れた業績を持つ。小島憲之氏「書紀と渡來書」(日本史研究四)である。氏は書紀の典故檢出と言ふ困難な作業の後に、書紀の典故語句の多くは藝文類聚(歐陽詢選)等の「類書」からの採引であることを明かにした。日本書紀本文批判史上まさに一期を劃すべき勞作であ

る。なほ同氏には「風土記の述作」（國語國文一六ノ四）がある。坂本太郎氏「纂記と日本書紀」（史學雜誌五六ノ七）は持統五年に上進を命ぜられた有力氏族の纂記が、書記編纂の資料として用ゐられたであらうことを論證した。西郷信綱氏「古事記の編纂意識について」（文學一四ノ九・一〇）は古事記編纂には、皇室乃至有力な氏族を中心に非血縁氏族を同族として組織しようとする政治的な意圖が働いてゐることを論じた。古事記を天皇制律令政治といふ環境から解説しようとした一つの試みである。土屋文明氏「中皇命私考」（文學一四ノ六）は喜田博士の説を退けて中皇命即間人皇女とする。外に益田勝實氏「播磨風土記は天平元年以後か」（日本史研究六）宮嶋弘氏「古事記は山城國葛野郡で書かれた」（國語國文一四ノ八）がある。

神話關係では羽仁五郎氏「神話學の課題」（歴史學研究一二四）がある。神話を社會的生產關係から理解せよと言ふ主張を中心とする。唯物史觀を神話學にあてはめたものである。松村武雄氏「日本神話の實相」は現在までの研究を一通り總括した。歴史地理では藤岡謙二郎氏「地理と古代文

化」天坊幸彦氏「上代難波の歴史地理的研究」奥野健治氏「萬葉山代志考」がある。資料關係では竹内理三氏編「平安遺文」第一が出た。平安時代初期の古文書約三百通を収める。京都市編「京都市史編年綱目第二卷」「同地圖篇」も刊行された。

（直木孝次郎）

四

ついで中近世における學問・思想・文化一般に關してなされた最近の研究著述によつて國史學界の動向を明かにしたい。一般に歴史研究の對象として文化事象を取上げる場合研究を抽象的・一面的なものとして終らしめないためには事象の客觀的事實性を重んずべきこと勿論であり、最近諸家の研究において例へば一時代の思想・文化を考察するに當つて生活領域全般への顧慮がなされてゐることも正しい歴史性を求めてゐるがために外ならない。

芳賀幸四郎氏「東山文化の研究」は嚴密なる史料採擇によつて、東山文化の基底に公家的なものを、また文化運動の推進力として皇室を認めたものであるが、推論に當つて

は歴史的傳統と社會的環境を重んずること例へば東山文化の性格を論じた第二篇において能樂の貴族藝術化と象徴的表現様式を重んじた金春禪竹における美的理念の展開との相關を明らかにせる如きである。堀内他次郎氏「茶道史序考」所收「村田珠光と茶會の傳統」も室町時代における茶會形式の推移、即ち集團的傾向の茶寄合から個性化的傾向の茶數奇への轉化をこの時代の武家の公家社會への同化過程と照應するものとし、この兩契機を止揚せる珠光が茶道の祖たる所以を明らかにしてゐる。多賀宗準氏「鎌倉時代の思想と文化」所收「慈圓僧正研究」においては愚管抄に見られる慈圓の歴史觀に彼の複雑な政治的社會的境遇の反映を見てゐる。又、高桐書院刊「國民生活記録叢書」は各時代の殘された日記記録等を解説することによつて社會生活の様相を描かんとするものであるが、個人生活の社會的意味、時代相を解明するを目的としてゐることは既刊「言繼卿記」「明月記」「春日社家記録」によつて推知される。中世庶民の歴史意識、精神生活についての研究、村山修一氏「日本中世に於ける歴史記念物の發生とその意義」(史料三十一)

一ノ「中世人の信仰生活にあらはれたる經濟觀念」(日本研究三)においても亦日常生活への考察を見ることが出来る。

和歌森太郎氏「中世興福寺における學僧教育」(日本教育史要二)は中世初期興福寺における學行一體の學僧教育が末期

に及んで學行二分するに至る過程をば僧侶生活の推移と關聯せしめて論じてゐるが、學と行との問題についてはまた宮坂哲文氏「禪林教育史に於ける學と行との關係——特に經典學習の側面より——」(日本教育史學會紀要二)がある。筆者は中國禪宗史に於ける經典學習の問題と日本禪宗史におけるそれを併せ論じてゐるが、榮西道元の學道論が唐代六祖及びその門下の禪風と規を一にすることを明らかにし、兩者ともに佛祖の經典を重んずる如來禪的傾向なることに注目してゐる。

思想史研究において思想生長の場所的考察が時間的考察とともに進められなければならないことは勿論であるがわれわれは思想發生の歴史的傳統を究めた著述をもつてゐる。

家永三郎氏「中世佛教思想史研究」がそれであり、親鸞道元、日蓮の宗教所謂鎌倉新佛教成立の歴史的事情、社會

地盤を考へてそれらの一次的根元的なものとして法然の的念佛宗を置いたこの研究は史的理解の如何になさるべきかを教へる所が多い。傳記的事實の實證的研究、師承關係の考證を主とする鷲尾順敬氏「日本禪宗史の研究」村上真精氏「禪宗史綱」の兩書と併せ見るならば明治大正期以來の史風の變遷を察し得るであらう。

中世佛敎の研究ととも近世儒學に關する研究も少なくない。本來異國の學である儒學がわが國において如何に受容され理解されたかといふ問題、日本人の精神生活、社會生活に及ぼした影響如何といふやうな點については未だ十分究明されたとは言ひ難いのであるが、岩城隆利氏「朱子學派の發生について」(日本史研究二)藤谷俊雄氏「日本儒學獨立の基盤」(史林三)(十、四)は日本儒學として成立するに至る思想的背景、社會的地盤について考察したものである。

即ち前者は近世朱子學派の發生と惺窩羅山に見られる現實性への關心、家康による封建制の再編成といふ主客兩面より眺め惺窩羅山の持佛論及び政治論をその手がよりとして考へたものであり、後者は近世儒學の成立を可能ならし

めた社會的條件、近世知識層の成立を中國における士人階級と比較することによつて日本儒者に見られる社會的獨立性の缺如を指摘した。近世儒學研究において現實生活との關聯の求められてゐることはなほ以下引用する諸論文においても亦認められるところである。

内藤晃氏「山鹿素行論究」(日本史研究一)においては素行の學の主張の根柢にあつて、その構想を特色づけたものとして兵學的體驗を認め、彼の學問を一貫する實學的傾向が體驗の所産なることを明らかにしてゐる、素行の和學受容の仕方より同じく實學的傾向の存在を指摘したものに阿部隆一氏「山鹿素行の青年時代に於ける和學の修養」(帝國學士院記事四三)がある。前田一良氏「徂徠學」(日本史研究四)は徂徠による古文辭學唱導の中に時代意識の底流するを認め、素行において見られる時代性の理解と連續する面を見出してゐる。

服部玄尚氏「陽明學と徳川幕府封建社會」(日本史研究二)も亦學説における社會狀態の反映を見たものである。古島敏雄氏「日本農學史」(第一卷)が農業に對する社會的要求の高まるところに農書の成立を見るとし「清良記」の時代性を檢

討し或ひはまた「農業全書」成立の社會經濟的意味を明らかにしてゐることは最近における學問史研究の一つの方向を示してゐるといはれよう。

次に近代思想の生長を江戸時代における農民觀にうかがはれる人格尊重の態度を見たものに清水三男氏「近世の農政思想」(日本史研究一)がある。これに對して奈良本辰也氏「近世に於ける近代的思惟の發展」(日本史研究三)は近代的な思惟の生長を商業資本發達の中に見出し近代思想の特性を幕末における商業資本の特殊な在り方と關聯させて論じてゐる。

幕末維新思想史の研究においても亦右に見たやうに思想成立の社會的事情についての考察は見られるのであり、尊王思想の政治的社會的勢力に對して檢討を加へた松島榮一氏「尊王思想の思想的意義」(歴史學研究一八)公武合體論と幕末の藩體制との相關を論じた奈良本辰也氏「幕末における公武合體論の形成とその意義」(歴史學研究一・二・三)及び江戸時代における西洋文化拒否論の封建的性格を明らかにした家永三郎氏「幕末に於ける西洋文化排斥思想」(展望二十)等がある。高瀬宣雄氏「近代政治思想史」(日本史研究一・三)本庄鑒次郎

氏「日本經濟思想史概説」は文獻にもとづいて政治思想、經濟思想の史的考察をなしたものである。

われ／＼はまた緻密な實證的研究によつてあげられた諸業績を忘れてはならない。岩橋小彌太氏「近世初期における樞紳子弟の教養について」(史學雜誌五十六ノ六)は近衛信尋公の男尚嗣公の日記についての詳細な研究の結果であり、この外石川謙氏「古往來の編纂年代及び普及の個別的考察 早川忠雄氏「南部盛岡藩の史的展開と建學精神」吉田昇氏「近世諸藩に於ける遊學規定」(以上日本教育史學會紀要二、所收)大久保利謙氏「津田眞道の著作に就て、二」柴田甚五郎氏「藤樹學者淵岡山と其學派岡山學派の研究」(帝國學士院記事四ノ一)及び沼田次郎氏「幕末における蘭人教師ボムへの事蹟」(史學雜誌五十六ノ八)等の如き勞作がある。

最後に最近養徳社より刊行された史料をあげておく。即ち「近世文學未刊本叢書假名草子篇」と「桃裕行校訂解説「北條重時の家訓」とである。前者に收めるところは「清水物語」「祇園物語」「海草」「智惠鑑」の四篇で、何れも教訓的色彩濃厚であり近世初期における倫理觀を窺知せ

しめるに足るものである。「六波羅殿御家訓」と「極樂寺殿御消息」とを収めた後者においてはこれらの家訓に示された武士感情を感得させるものがあり、精到な解説によつて兩家訓の家訓史上の位置、北條重時の精神生活に關して十分なる知識が得られるであらう。

以上極めて概括的にはあるが最近の研究を通じて看取されるところを記した。文中引用せる諸論文の内容を詳細に紹介することの出来ないのは残念であるが主觀的、獨斷的解釋におちいることを警戒しつゝ展望を試みた筆者はこれらの諸研究によつて多くの教示されるところがあるとともに將來更に研究を要すべき點も亦考へさせられる。

例へば思想史研究において今日特に現實社會との意味關の求められてゐることは文中屢々記した如くであるが、人間の社會性についての理解が人間そのものへの理解と混同されることは十分注意されねばならない。思想家の思想内容を抽象しこれに恣意的解釋を加へ自己流の理論構成をなすことは勿論凡百の社會現象の中に思想家を没しさり社會の附屬物化することも同様正しいとは言ひ得ないであら

う。筆者が文頭において生活領域全般への願感を一言したのも人間理解の十分進めらるべきを思ふがために外ならぬ。

五

眼を中近世社會經濟および政治史に轉ずれば、その要請が戰後決定的であるにかゝらず、啓蒙的論文以外に見るべきもの少く、この領域の展望は我々を大いに鞭打つものがある。それは理由なきことでなく所謂社會經濟史とは何かが、今日程その態度の決定にせまられたことはなかつたからである。たとへばかつて西洋經濟史に大きな功績を果した「大塚史學」への左翼の苛烈な批判を見よ(一九四七年科學年鑑)かくて或者は唯物史觀にその方法を求め或者はアカデミー國史學の傳統の上に新たな己が分野の位置づけを試みんとする。その苦惱が學界の均衡を破つたのであつた。けれども何れもが國史學を廣い視野における前向きな學たらしめんとする努力の表白として、單に社會經濟史をその現象の時間的理解に終らしめることなく又特殊史の一分科にもと

どむることなく、科學的計畫性をもつたより高度の歴史學に發展させることに課題があるはいうまでもない。

我々はまづこの種の反省の例として前出の石母田正氏

「政治史の課題」(歴史評(論六)を今一度ふりかえてみよう。

氏はいう「かつての哲學者が考え出した理念と同じように獨立化された理念が現實に對して全く無力であり、そこから現實に何もものをつくり出し得ないという反省からはじめて歴史學は榮えて來たのである。理念の哲學の貧困と非生産性にたいする闘いの中にこそ生産的な歴史學の生命があつた」まことに歴史學こそその生産的使命を果すべきであつたが、さらばそれは如何にして實現され得るものであるか。「歴史學は正しく検討された事實によつて構成され建築されるべきものであるが……(かかろ)構成力、構

想力の中にこそ論理と思考力と方法が生きて來る世界があるのである」ここに歴史學の生産性が求められるとすればこの構成力は如何なる内容規定をもつものであろうか。氏はその鍵が「歴史學の中には歴史的現實を與えられたもの完了したものとして理解しようとする觀想的な性格と、そ

れをつきやぶつて現實の本質と法則性を見出し未來への指針を發見しようとする實踐的性格との矛盾がいつでも存在してゐる」ことにあるという。即ち後者の實踐的性格こそそれでありこれが構想力に方法論に政治性をもたらしめるのである。かくて歴史學が生産的なるためには「歴史學の政治性の問題を學問自體の内面的モメントとして把え」ねばならぬとする氏の問題提起はたしかに國史學の在り方にも一つの方向を示すものであろう。

かゝる方法的反省は既に氏をして、「中世的世界の形成」を書かしめていたのであつて、これが戦後古代より中世にかけての社會構造に注目すべき理論と生々たる構圖を與えたのは今さら紹介するまでもない。先に古代史の展望にもふれられた如くそれは伊賀國黒田庄に場面をとりつゝ、日本の中世が如何に形成され來つたかを、古代貴族の律令的東大寺と中世形成の主體たる地方領主層の對立においてこれを辨證法的に叙述したものであるが、何よりもこの中世農村の領主制の發展が古代家族の揚棄と共同體的諸關係の克服という二つの面をもつていたとする指摘は、何故日

本が中國と異り中世を展開し得たかに答えるものとして重視されよう。かくて中世社會史には劃期的業績を果したものであつたが、徒らな讃辭のみが氏の勞に報ゆる所以でないのはいうまでもあるまい。藤間生大氏「日本庄园史」も初期庄园についてその構造を社會構成の面より追求し、古代社會、ここでは延喜までの貴族的土地所有の形態、没落過程の基礎的條件を分析する。その主眼は古代奴隸制社會であるが、中世史の始源の課題としても注目すべき勞作である。松本新八郎氏「南北朝内亂の諸前提」(歴史評)は同じく社會構成發展の視點において、中世を鎌倉室町に二分する南北朝内亂の諸前提を説明せんとしている。その意圖はこの内亂が如何なる意味の革命であるかを明めるにありそのため内亂における三つの勢力の動き、即ち天皇公家の反革命の試みと幕府體制による舊武家階級(地方領主層)の現状維持の要求と、鄉村制度にたてこもつて中世領主制下に成長し來つた農奴小農民地主の革命的勢力を指摘する。そしてその何れもの經濟的物質的條件を分析することによつて、鎌倉二重政權の意義及び南北朝動亂と室町下克

上の社會から。近世封建社會再編成への移行の必然性を示唆している。重點はこの内亂が、鎌倉期を通じて地方領主制下に實現され來つた新しい農村に比較的自由な鄉村制度の成熟によるものとするとところにある。近世封建社會がかかる鄉村制を基礎として成立していることは氏も既に説かれてゐる。以上の三氏は何れも同じ基本的な線にそのものであるが、それにもかゝらずこれらの所説を通じて讀者が腦裡に描く中世全史の構圖はなお多少不整合の感をまぬがれぬであらう。かくいへば中世社會經濟史の課題が何であるかは自ら明かである。それは氏等の理論を受け容れつともさらに史實を検討することによつて中世社會の全過程を再構成することである。そのための基礎的研究の一端として宇尾野久氏「中世社會史研究の動向」(歴史評)が注意されるが、こゝに提出された四つの問題を紹介すれば、

- (一) 農民社會の組織
- (二) 灌漑に現はれたる名の意義
- (三) 中世商業に現はれる名田の位置
- (四) 中世都市(塚)である。これらは決して孤立した個々の問題ではないし、又これだけで充分ではないが詳説はさしひかえる。

なる古島敏雄氏「日本農業技術史上」が注目すべき勞作であり、同氏「家族形態と農業の發達」も前にして要を得ている。先出の西岡虎之助氏「日本農家に於ける自給經濟生活の展開」も中世農村社會の領主層について見るべきものであらう。

さて近世史で注意すべきは林基氏「糸割符の展開——鎖國と商業資本」(歴史學研 究一、二六)である。鎖國は結局日本商業の廣汎な展開を犠牲にしたのであつたが、その鎖國決定の一つのモチーフとして、封建的權力に卑屈に寄生する一握の高利貸的商人團II糸割符商人の利害が働いていることを指摘しているのは、新しい事實の發見として高く評價されよう。石井孝氏「幕末に於ける幕府の銅輸出禁止政策」(歴史學研究 一三〇)も見のがし得ぬものである。次に奈良本辰也氏「近世封建社會における商業資本の問題——毛利藩を中心とせる特質の解明」(日本史 研究五)はその意圖するところが明治維新革命の本質と性格の見透しを得んとするにあるが、その前提條件としての近世封建社會における商業資本から出發して「雄藩」經濟の全構造の把握を試みんとする。即ち

參議交代制等による政治的強制が如何に大名の經濟を貨幣經濟に依存させその財政を行詰らせたかをつき、それ故の農民への搾取が農民唯一の活路たる農家副業の正常な發達さへ阻止して、農村自給經濟を分解させたことを指摘する。かくて近世封建社會を支えていた近世鄉村制下の中農層の廣汎な没落をあげ、この中農層とこれに寄生する商業資本の伸張とを對立させるが、毛利藩にあつては中農層II郷士(藩士改革派)と國內商業資本との鬭争が歴史の起動力となりつゝも、前者が大坂商業資本に依存しながらこれを續けてゆくのを明かにしている。なお同氏「幕末における郷士II中農層の積極的意義」(歴史學 論一〇)が併せ見らるべきである。以上氏の論稿を通じて我々は何故近世封建社會の構造が問題となつてゐるか、またどのようにそれが取りあげられてゐるかを知り得るであらう。

こゝにおいて日本資本主義發達史の課題がその前景におし出されてくる。近代史に主導性を示す日本資本主義分析の問題は、既にマルクス主義經濟學者による論争展開の研究史をもつのであるが、歴史學徒の廣汎な協力の要望され

る今日、アカデミー國史學もこの方面への準備の不足はとも角、自己の殻を破つてこれを批判攝取し自らの課題ともせねばならぬのである。あらためてこの資本主義論争を紹介する紙幅はもたぬが社會經濟獎勵研究所「日本資本主義論争史」はこれをよくまとめている。最も基本的テーマはマルクスのいわゆる價值法則がいかにも具體的形態をとつて自己を貫徹して來たかというにあるが、それは「資本論」、「ロシアにおける資本主義の發達」等に依據して問題が提起されても、いうまでもなく經濟發展の全過程はその内部的主要導因とこれに結びつく歴史的社會的諸條件との綜合把握の上に理解さるべきものであつた。こゝで國史學徒の特に注目すべきは資本主義前史としての幕末維新史であつて、課題は一應次の二つに分けられるであらう。(一)幕末維新における經濟的構造——具體的には産業の發達と商業資本、資本制生産への展望の問題等。(二)國家理論——經濟構造から相對的には獨立した國家權力の問題。

(一)は管ての「マニニファクチュア論争」と「新地主論争」として展開されたがマニニファクチュア(資本制生産)

と農業問題は決して分離して考察さるべきものではなかつた。(二)は戦後新しく再認識されんとしている課題であるがもとより(一)を基礎としてのみ論じ得るのである。(一)については既に服部之總氏が幕末における經濟發展の段階を考察してこれを「嚴マニニ時代」と規定し、それが契機となつて廣汎な問屋制マニニの存在が判明したが、問題はマニニ成立の一般條件としての封建制の強度・内部組織の問題、國內市場の形成を考察するための封建農業の分解過程、農村の階級分化、それと共にこれらに果す日本近世商業資本の歴史的役割が、正しく把握されねばならない。かくて何よりもまづ近世封建社會の構造分析が必須の課題となつてくる。この具體的な研究を果さずして近代を論ずることは出來ない。それ故先の奈良本氏の論稿もこの線に沿つてくるのである。

さてマニニ論については先述の如くであるが、なお我國問屋制マニニの具體的形態の把握とその縱横の展望ならびに歴史的價値が必要である。羽鳥卓也氏「分散マニニファクチュア論批判」(歴史學研 第一二七)は豊田四郎氏の分散マニニ論

を批判し過去のマニエ論争が専ら型の構造規定に集中されていたこと、それより發展形態を追求することがより重要であるとの見解に立つとも、開屋制マニエが分散マニエといふ型の發見にもかゝらず、結局その資本制生産様式への轉化は決定的に阻止されていたとする。氏の據られた藤田五郎氏の例證が我國で最も發展の遅れたと思われる東北

地方の産業分析であることを豫め諒承しておかねばならぬが、それにしてもこれだけでは服部・土屋兩氏論争の昔に逆行するものではなからうか。幕末には氏もいわれるように既に「事實上の賃労働者」があらわれたのであり、彼等が小作農乃至質地農家の家内家計の補充者であつてもかかる「多數の労働者が同時に同じ労働行程に使用されるといふ……この事實は資本制生産の起點となるもの（マニエ資本）であろう。「西歐においてさへ資本主義のマニエファクチュア期は工業労働者の農業からの完全な分離を行ひえなかつたが、ロシアにおいては農民を土地に縛りつけてゐる數多の制度の存在のために、かかる分離は遲滞せざるをえなかつた」（レニン發達）のである。それにもかゝら

らず資本主義は發展する。それ故開屋制マニエの發展の方向が同時に農奴制の維持存続によつたとしても決してそれは絶望的ではない。けれども此の論文はマニエについて教えられるところが大きい。たゞこの期における商業本と資産業資本の絡み合ひ、不可分の關聯を明かにするのが重要であろう。

次に（二）の問題は明治維新をめぐる政治史の課題でもあるが、維新史への反省は一般的傾向として注意すべきである。遠山茂樹氏「幕末政治過程における皇室」（歴史評）

服部之總氏「絶對主義の史的展開」（中央公論）（二二年四月）

也氏「幕末における公武合體論の形成とその意義」（歴史研究）

（二）同氏「明治維新革命の全體性」（潮ノ流）

が中央集權の絶體主義とその成立過程の問題をとりあつかつてゐる。

服部氏は明治の絶對主義國家への道を、フランス公使ロッシニの指導をうけながら徳川氏を中心にする方向と王政復古をスローガンとする天皇中心の方向の二つの道において把握せんとするが、幕末政治闘争を王政復古にまで導いた一貫せる勢力の基盤は、マニエ段階における階級としての

ブルジョアジーであつたとする。奈良本氏はその二つの道を肯定しながら何故一方が選ばれそれが勝利を占めたかを問う。氏は第三者としてのブルジョアジーを重く見ず、彼等が加擔せざるを得なかつた諸藩内部の關係こそ重要であるとす。そこに西南雄藩が氏に取りあげられる理由があつた。西南雄藩の勝利はブルジョアジーの援助もさることながら、天保改革を中心として具體的に歴史の表面に登場してくる商品生産者としての中農層の内部的な支持、彼等の意志の政治的諸關係への反映によるものとされる。かくて維新革命を準備して行つた主體は生産的中農層であるが彼等の發展の道が中道にをいて歐米資本主義に攪亂され國內の特權資本に内部から壓迫されたところに明治維新革命の性格をさぐる鍵が求められるとされる。かくてこれらの方法と史實の評價の再檢討の上に明治維新の解明と鳥瞰が必ず果されねばならぬであらう。E.H.ノーマン氏「日本における近代國家の成立」(大窪憲一譯)は明治維新後における絶對主義的國家の急速な創始と、國家の保護統制を條件とする工業的經濟の發達を分析しているが、右に關聯し

て是非一讀さるべき好著である。

(高尾一彦)

六

民俗學的研究方法が漸く正しくその價値を認められ、その研究成果が多く國史研究の中に入取られるやうになつたのも戦後に於ける著しい傾向の一つである。自ら新しい國學と名のり、一般常民の日常生活の變遷とその心意の推移をば、同胞としての共感と同情を以つて内より理解し把握せむことを期する日本民俗學なるものは本來廣義の國史研究の一部としてあるべきものであつたにかゝはらず、舊來の文獻的史學の方法の限界を明らかにし、いはゞその否認の上にはじめられた民俗學の研究は久しい間國史の研究とは自ら別箇の領域を形作つてゐたが、今や民俗學そのものゝ顯著なる生長と、戦後に於ける國史學の新なる進展とは期せずして兩者の歩みよりとその融合とを結果することになつたのである。今その第一の點に就いていへばわが國に於けるこの學問の創始者であり、今もなほ變らぬ指導者である柳田國男氏の研究業績がその最も主なるものなるこ

とは何人も認めるところであらう。氏の研究は戦時中その門弟や共力者達が次第に離散して行つた間にも不斷につゞけられ、その成果は終戦後次々とまとめられて來てゐる。

今その主なるものを公刊の年次に順つて拾へば、舊著の再刊を除き「村と學童」（十二年九月）「笑の本願」（廿一年一月）「先祖の話」（廿一年四月）「毎日の言葉」（廿一年七月）「物語と語り物」（廿一年十月）「家閑談」（廿一年十月）「新國學談・祭日考」（廿一年十二月）「口承文藝史考」（廿一年一月）「新國學談・山宮考」（廿二年六月）の多きに及びその旺盛なる活動は眞に驚くべきものがある。これらの諸著に盛られた氏の研究は從來とかはらず極めて多方面の問題に亘りこれを一樣に批評することは甚だ困難であるが、それらの中にも自ら問題の中心となり、氏が最も力を注がれてゐるかと思はれる點は、わが國民固有信仰の中核をなす祖靈祭祀の問題とその地盤としての家の問題ではないかと考へられる。つまり「先祖の話」や「新國學談」乃至「家閑談」に於いて取扱はれてゐる問題であつて、邇れば戦時中に發行された「日本の祭」や「神道と民俗學」か

ら、更に遠く「石神問答」や「巫女考」に源流するところの研究である。それは一見極めて特殊な俗信やいはゆる迷信の研究から出で、今や國民精神やその生活感情の最も深奥にして中核的なるものゝ究明に係ることゝなりまたその點に於いて正しく正統の國史學の領域と相交ることゝなつたのであつて、例へば最近の「新國學談」の如きその問題の緒を全く從來の國史學の准據するところの文獻・古典の中に求め民俗學的資料の巧みな援用によつてその解決を計つてゐるのである。家の問題また同様であつて「家閑談」の中に扱はれた「厄介及び居候」若しくは「大家族と小家族」等の如きは現今國史學界に於いて最も中心的な問題となつてゐるところに對して極めて示唆に富んだ所見を示して居られる。但し柳田氏のかやうな活動とその業績に就いては松島榮一氏その他の批判がなされてゐることも一應注意すべきであらう。（歴史學研究）

戦前から斯學にとつて唯一の雜誌であつた「民間傳承」は十九年六月以來休刊を餘儀なくされてゐたが、終戦後一年廿一年八月から再刊されることになつたが、その復刊第

一號の卷頭に於いて柳田國男氏は、今日民俗學研究者の第一になすべきことは既往に蒐集せられた老なる資料を適當に整理して萬人の利用に供することであり、それが爲には先づ研究者相互の聯絡と協力が要請されると共に、問題の重要性に従つて研究に順位を附け且つ今後新に來るもの爲によりき教本を用意しなければならぬといふ意味のことを述べられてゐる。氏がかねて試みられてゐる民俗語彙の編纂はその第一の目的に副はうとするものであり、戦後まづ農村語彙の増訂版が發行された。廿二年の新春に氏によつて設立せられた日本民俗學研究所の目的も亦何よりもこの提言の趣旨を實現せんとするにあるものと解せられるが、研究者相互の聯絡と協力の點に就いていへば同じく二十二年五月始めて東京に於いて催された人類學考古學、言語學等姉妹科學の學會聯合大會の如き最も意義ある企てであつた。同大會は最初の試みでありなほ準備の行届かない憾みがあつたが、その成果はむしろ今後に期待されるべきものであらう。

第二の民俗學教本の作製に關しては、和歌森太郎氏の

「日本民俗學概説」(廿二年八月)がまづ注意されなければならぬ、この種のものでは從來柳田氏の「郷土生活の研究法」並に關敬吾氏との共著「日本民俗學入門」が一應その標準的なものとされ、後者は戦後その再版が出されてゐる。和歌森氏の新著はこれらの書を十分参照しつゝ、隨所に氏独自の見解を披瀝し、民俗學全體を一つの體系にまとめたところ、その手際は高く買はるべきであらう。氏は元來國史の畑から出て肥後和男氏の影響の下に次第に民俗學に接近せられたのであるが、近時柳田氏の一統に加はることによつて一層明確に民俗學的研究に専念されることになり、氏におとらぬ多産な仕事をされてゐる。就中その「國史に於ける協同體の研究」(廿二年八月)は曩に柳田氏に就て言つたその中心問題と同じく問題としたもので、今日までのところなほ上巻だけしか公刊されてゐないが、氏は本來歴史家としてかねて民俗學が「時代」觀念に於いて缺くところがあり、民俗の變遷を統一的發展的に把握するところがないことを不満とし、この書に於いてはわが國に於ける族縁協同體の變遷を考ふに就いて遺文、遺物並に

遺習を同等に資料として取上げ、文獻學的にと共に考古學的民俗學的に考察するところを綜合して、これを上代中世並に近世といふが如き一般時代區分に從つて叙述しようとしてゐる。氏が別に「民俗學から見た日本古代社會」

(三島一等編「日本古代社會」一所收)の中に於いて述べられるやうに、純粹に民俗學的方法を以つて古代社會を明らかにすることは困難であるが、文獻的歴史研究と併用することによつてその完全が期しえらるべく、これを具體的の例に就いていへば氏の奈良朝の戶籍を資料とする上代の族縁協同體の研究は民俗學的知見を背景とすることによつて同じ問題を専ら唯物史觀的に取扱つてひろく時代の注目を惹いてゐる石母田、藤間兩氏等の一面的見解に對するよき反省となつてゐる。この問題は夙に有賀喜左衛門氏等も取扱はれてゐるところであるが、(「東亞社會研究」第一輯所收「日本上代の家と村落」)氏は新しくまた柳田國男先生古希記念論文集「日本民俗學のために」の第二輯に「同族と親族」を書かれてゐる。日本民族學協會編輯民族學研究も、「日本に於ける社會結合の諸問題」特輯號を出し、肥後和

男氏氏の「子組織」尾高邦男氏の「職業と社會集團」關敏言氏の「同族結合の様式」等を收め、この方面の研究に對するよき寄與をなした。

和歌森氏の「八朔考」(同氏「日本民俗論」所收)平山敏治郎氏の「耳ふさぎ資料」(「民間傳承」十一ノ六、七)等以上のように如き諸論考に比すれば、その取扱ふところ極めて些末の一習俗に過ぎないが、從來單に民俗學の上に於いて問題にされてゐたところを過去の文獻の上にたどり求めることによつて、その起源と變遷とを時間的に正確ならしめた點に於いて國史と民俗學との交流を問題とする上に注意すべき業績であつた。かやうな研究は今後更に各方面に就いて益々多くなさるべきものと思ふ。

(柴田 實)